

菱形池〈ひしがたいけ〉の豆だぬき（加古川市別府町新野辺）

加古川の南方、播磨灘〈はりまなだ〉に接して新野辺〈しのべ〉というところがあります。附近は、一帯に川が少なく、灌漑〈かんがい〉用水は池にたよらねばなりません。そのため、まわりには、大小いくつもの池が掘られました。菱形池〈ひしがたいけ〉も、もちろんそのひとつ、池の形をそのまま名とした小さいものです。しかし、この池のまわりには竹や、つばき・うるしなどがいっぱい茂り、南がわの堤〈つつみ〉には一本の大きな木さえ生えていました。いつごろからでしょうか、この木の根元〈ねもと〉に、一びきの豆だぬきが住みついたのです。

この豆だぬきは、毎晩、子〈ね〉の刻〈こく〉（夜の十二時）になると、きまって赤ん坊の泣くような声を出します。村の人や通行人は、それを聞くと気味〈きみ〉わるくなり、中には、恐ろしさに足のすくむものもありました。池の持ち主はそれを聞いて、「それでは、この木を伐〈き〉りましょう。」といいました。

翌日、腕達者〈うでたっしゃ〉な木挽〈こびき〉が呼ばれました。木は、根元から伐るのが定法〈じょうほう〉ですが、豆だぬきの居るところは気持が悪く、そこから二メートルばかり上を伐りかけました。すると、ふしぎにも、切口から水がタラタラと流れ出しました。

「これはいけない。」
と、もっと高いところに大鋸〈おおのこぎり〉をあて、やっと伐り倒しましたが、この木挽は、一日おいた次の日から急にからだ痛み出し、七転八倒〈ひちてんはっとう〉しました。村人たちは、「きっと、豆だぬきがあたん（あだうち）をしたのだろう。」と、ささやきあったということです。

（『加古川市誌』二）

